景気変動理論・考

── シュムペーターと高田保馬をめぐって ──

J.A.Schumpeter and Y.Takada on Business Cycle Theories A Comparative Review

小川　智弘 *
Tomohiro Ogawa

1.　はじめに

景気の波動的変動についての関心は，戦後における経済の高度成長と目覚ましい発展という時代の流れの中で，どららかといえば薄れ，まるで潮が引くがごとくに学界における関心も後退していった．それは，あの1930年代の大不況を乗り越えてこられたことによる資本主義経済に対する自信と，そうした不況のドン底からでも，ケインズ（J.M.Keynes）の示してくれた処方箋に従って財政政策を行えば，再び経済を回復し，やがて好況をも再現し，しかもそれを持続できるかもしれないという，言うならば経済の“特効薬”を手に入れたかに思われたとき，もはや景気の波動的運動は資本主義経済の宿命という問題ではなくなり，統御可能な問題へと転じていったのである．それ故，その関心は景気の後退局面をより穏やかにし，分配の問題の桎梏から脱脚する最善の方法として，経済問題の中でも最も厄介で深刻なこうした問題を同時に解決できる素晴らしいものとして経済成長が考えられたのである．即ち，景気の波動的変動は不可避であるかもしれないが，その苦痛は緩和できると考えられたのである．こうして人々の関心が経済の成長へと向けられていったのは，ごく自然の成り行きであったわけである．

「ケインズ革命」によって，経済のこうした厄介な問題を克服できたかのように思われたのであるが，必ずしもそれがうまくいったわけではないことがわかってきた．1960年代末に「ローマ・クラブ」が指摘したような資源の制約による成長の限界といった問題や，1970年代からの慢性的なインフレーションないしはスタグフレーションという不況下でも物価が上昇しつづけるという問題や，最近になっての環境問題や自然保護といった問題から，成長による問題解決が新しい問題を生ずるというジレンマに陥ってしまったのである．成長を持続させて破滅へと進むのか，さもなければ，経済の波動運動に伴うある程度の苦痛や分配問題の桎梏を甘受しながら，厳しいイバラの道を歩むのかを選択しなければならなくなってきたのである．こうして再び景気の波動的変動の問題について関心がもたれるようになってきたのである．しかし，わが国ではヨーロッパやアメリカにおけるほどには長期の波動についてはいまだ関心が高くはない．もっぱら中期波動といわれる，周期９～11年のいわゆるジュグラー・サイクルないしは20～25年のグヅネッツ・サイクルといわれるものがその研究対象の中心となっている．これらの波動運動についての研究でわが国にも少なからぬ影響を及ぼしていった一人の巨匠シュムペーター

* 英語専攻

と，彼から少なからぬ刺激を受け，日本人経済学者の中でも最も深い親交を持った一人である，高田保馬の二人の研究について両者の理論を検討してみることは，再びこの景気の問題が関心を集めはじめたとき，興味を惹かれる問題であると同時に，日本における景気の研究についての草分け的存在である高田保馬の経済学体系とシュムペーターの経済学体系について研究してみることは，何らかの意味を持つものであると思われるので，ここではこの両者の理論について対比をしながら考察をしてみることにする．

2.　高田保馬とシュムペーター

まず二人の簡単な履歴について述べておこう．高田保馬とシュムペーターはともに1883年（明治16年）同じ年の生まれである．この年は記念すべき年である．即ち，この年には奇しくもケインズが生まれ，カール・マルクス（K.Marx）がその生涯を閉じた年でもあるからである．

○高田保馬の略歴

1883年（明治16年）12月27日佐賀県小城郡三明町に生まれる．

第五高等学校から京都帝国大学に進み哲学を専攻する．

1914年（大正３年）京都帝国大学講師

1919年（大正８年）広島高等師範学校教授

1921年（大正10年）東京商科大学（現在の一橋大学）教授，文学博士

1924年（大正14年）九州帝国大学教授

1930年（昭和５年）京都帝国大学教授
関西大学講師

この間，昭和５年～９年までは九大と京大の教授を兼務する．

1946年（昭和21年）教員不適格の判定を受け公職を去る．

1951年（昭和26年）判定破棄，名誉回復して教職に復帰

1951年（昭和26年）大阪大学教授（経済原論担当）

1955年（昭和30年）大阪府立大学教授，

1963年（昭和38年）龍谷大学教授，

1965年（昭和40年）文化功労賞受賞　龍谷大学教授退官

1972年（昭和47年）２月２日没　享年88才

○シュムペーターの略歴

1883年2月8日 当時オーストリーのモラヴィア地方（現チエコスロバキア領）トリーシュで生まれる．

1906年　ウィーン大学で法学博士の学位を取得（ローマ法・教会法）

1909年　チェルノヴイッツ大学教授

1911年　グラーツ大学教授

1919年　カール・レンナー内閣の大蔵大臣

1921年　ビーダーマン銀行頭取

1925年　ボン大学教授

1932年　ハーバード大学教授

1950年１月８日没　享年66才

高田保馬は病弱であったが天寿を全うして88才の長命であったのに対し，シュムペーターは小柄ながら非常にエネルギッシュで活力に満ちた人であったが，それが66才で脳卒中で倒れるというのはまさに運命の女神の悪戯としか思えない．こうした点を除けば，両巨匠がひとりの人間としては必ずしも幸福な，恵まれた一生を過ごしたわけではなかったという点で共通するものを持っている．それは天才が世俗にはなかなか理解されず，受け入れてもらえないというよい例を示していると言えるのかもしれない．そして共に経済学とはちがう分野の研究から出発し，やがて経済学に関心を持ち，しかもその波動的運動という共通するテーマにとりくんだ点でもよく似ている．さらに職場を幾度も替えたところまでまったくよく似ているのである．そうして二人は1931年末から翌1932年1月にかけてシュムペーターが日本に立寄り，国内で何回か講演した折，神戸商科大学（現神戸大学）での講演の時に討論することになる．ときに両巨匠とも48才のときである．高田保馬が，経済学を勉強するには何から始めたらよいかと質問したとき，シュムペーターが「Begine with Walras」と答えたという話はあまりにも有名

であり，この一言で，シュムペーターが何を考えていたかがはっきりとわかるのである．こうして両者は以後は専ら文通により親交を深めていくのであるが，二人は二度と会うことはなかったのである．

また二人の学風に共通するものとして，市場における人々の行動科学としての狭い意味での経済学ではなくて，もっと広い意味での，歴史を背負った社会現象を分析対象とする“社会経済学”とでも言えるような経済学を考えていたという点である．哲学から出発し，社会学を講じていた高田保馬の経済学がこうしたものになっていったのは当然であるが，彼はまた勝れた理論経済学者でもあったのである．そのあたりは彼の研究業績を見てみるとよくわかる．

高田保馬の研究業績の略歴

1912年～1923年，社会学を講義

1912年「レオン・ワルラスとローザンヌ学派」（訳）その他に社会学関係の論文も多数

1924年『経済学研究』（岩波書店）

1928年『経済学』（日本評論社）

1929年『景気変動論』（日本評論社）現代経済学全集（全13巻）の一冊として出される．

1929年『価格と独占』

――『経済学新講』（岩波書店）第一巻，1932年までに全5巻完結．

彼の業績はここにはあげきれない程にあり，おそらく，わが国における最多産の記録を持つものの一人と言ってよいであろう[1]．彼の学説史的研究がここでのテーマではないので，ここでは彼の理論的展開がどのようなものであったかを概観することにとどめる．彼の経済学の体系はおよそ次のようになっていると思われる．

経済の（諸原理から成り立つ）理論
↓
方法論
↓
階級論
↓
民族論

彼の体系の全体像は「勢力説」により統一的に説明されている．もちろん経済理論においても，価格論，利子論，景気変動論などの一連の理論の背後にも同様に「勢力説」がある．

それは1923年～1924年における次のような彼の業績の中のいくつかから読みとることができる．

1923年　「利潤成立の機構」利子の理論其二（『新講』第4巻）京都大学『経済論叢』26巻2号，3号

――「経済静態について」『経済論叢27巻1号，2号　これは『景気変動論』の一部分となっている．

――「経済動態理論－その総説」，『社会科学研究』第2巻1号，これも『景気変動論』に入れられている．

――「資本主義の社会学的考察」『社会経済体系』第18巻（『国家と階級』）

1924年　「勢力と経済――勢力説に対する批判」『経済論叢』第3巻5号　これは『勢力説論集』に納められている．

他方，シュムペーターの経済学の体系がどのようなものであったかというと，これがまた非常によく似ているのである．ただし，高田保馬の体系がどちらかと言えば，垂直的に深化させる方向に一連の研究が向っていたのに対し，シュムペーターの場合には，むしろ水平的に広がった体系として，理論，方法論，体制論，学説史といったものが並列され，総合化されて一つの体系となっている点で多少異なる．

シュムペーターの業績の略歴

1908年　『理論経済学の本質と主要内容』

1912年　『経済発展の理論』（初版）

1914年　『経済学史』

1918年　『租税国家の危機』

1926年　『経済発展の理論』（改訂版）

1936年　『景気循環論』

1942年　『資本主義・社会主義・民主主義』

1954年　『経済分析の歴史』

その他，晩年においては，経済学や資本主義の危機についての論文もあるし，高田保馬と同様に大変多産である．そして両者は共にイデオ

ロギーは受け入れなかったが，あのマルクスの『資本論』の体系に匹敵するような一大体系を築き上げようと考えていたという点でも共通するものがあるのである．

この様に多くの類似点や共通するものを持ちながらも，両者の景気理論はその型式的類似性とはちがって，本質的にちがうものであった．高田保馬の理論の問題点と，シュムペーターのそれとを，この景気理論に限ってここでは比較考察をしていくこととする．

3.　高田保馬の景気理論

彼は景気の波動的運動を景気変動と呼ぶのがよいとして，景気循環という言葉を使わなかった．その理由は次のようなものであった．

1）それが確かに cyclical な運動をするかは容易に論証できない．

2）変革の周期が偶然的に一定であったかもしれない．

3）特定条件のために，不断に沈滞又は上昇する構造的なものかもしれない．

4）しかし，長期波動ではなく，いわゆる定型的景気の変動（ジュグラーの波）を対象とする場合には，循環的性質を有すると信じられるので，景気循環というより景気変動というのが事実によくあてはまるという[2]．

今日では，Business Cycles ないしは Trade Cycles をむしろその循環的性質を考えて，景気循環と訳すことが多いようである．

今日，この分類法は一般的になっていると思われるが，高田保馬も景気変動理論を次のように分類する．[3]（右欄 A図）

A図

- 内生的理論
  - 貨幣的理論
  - 非貨幣的理論（実物理論）
    - 過小消費税
    - 過剰投資説
- 外生的理論
  - 心理説
  - 太陽黒点説
  - 革新説

そして，彼の理論はその原因を経済の内部における適応の遅れや行き過ぎによる，いわゆる経済的惰力によるものとして，<錯誤説>を唱えるのである．即ち，シュムペーターのような質的変化を伴わなくとも，量的変化のみから十分に説明しうると考えるのである．この点は両者のヴィジョンの基本的な相違点である．この点についての吟味は後で行う．高田保馬は経済変動を次のように分類する[4]．

- 偶発的変動
- 前進的変動
  - 経済的成長（量的拡大）
  - 経済的発達（質的発展）
- 循環的変動

さらに，より大きな変動として長期の変動を考え，彼はそれを経済の前進的変動として次の様に分類する[5]．（下図 B図）

ただし，彼はコンドラティエフの波についてはその著『景気変動論』で「此長期の変動は労銀，物価，利子，外国貿易，石炭消費その他の標徴に認められるという．」[6]にとどめ，構造変動として若干の考察がなされているだけで彼自身のモデルは提示されていない．さらに，シュムペーターが景気の各波を長期のコンドラティエフの波，中期のジュグラーの波，短期のキッチンの波と三種に分類したのに対し，高田保馬は否定はしないがなお慎重であり，「確認にな

B図

- ○Aタイプ（組織自体を所与とみる）
  - リカードォ型（静学的）
  - シュムペーター型（動学的）
- ○Bタイプ（組織そのものまで変動の浪にあらわれるものとみる）マルクス型（動学的）
  - 〔シュムペーターによれば、このタイプは歴史の経済的説明を試みようとするものである〕
- ○Cタイプ（組織変動の可能性を考えながら、なお自由経済組織の存続をかんがえる）ケインズ型

ほ時間の経過をまたねばらぬ」[7]としているのである.

高田保馬は経済が変動するということは，適応の不完全さにより撹乱されるもので，彼はそれを「経済的惰力」と呼んだのである．その経済的惰力を彼は次のように分類している.

a)消極的惰力 —— 摩擦といわれるもの
b)積極的惰力 —— 行き過ぎ，適応の過超

さらに次のようにも分けられる.

a)合理的惰力 —— 価格変動における遅速
b)不合理的惰力 —— 単なる人気の作用，悲観と楽観

これらの惰力が，その他に何の撹乱要因がない場合でも，即ち，経済が均衡している場合でも，例えば人口の増加があれば，生産方法の変化などなくても，その適応の遅れから十分に撹乱は始発せられるものであると考える．このように現実の経済は常に変動をしており，適合しようとする力が上述の惰力となって不均衡状態をつくり出していくと考えるのである．このうよな不均衡過程を彼は動態と呼び静態と区別する．彼の区別に従えば，それは次のようになっている.

静態と動態

体系が落着くところの均衡経済で，正常状態であり，生産量，貨幣量，人口等のおよそ数量として示されるものは一定であり，いわゆる一般均衡理論による分析的考察で到達することができる一つの理想型であるものを彼は静態と呼ぶのである．それはさらに次のように分類される.

静態の種類

a)厳密静態（純粋静態）—— 生産方法一定，利子なし，企業利潤なし

b)正常静態 —— 生産方法一定，資本利子あり，企業利潤なし

c)安定静態（中間静態）—— 生産方法の変化あり，利子あり，企業利潤あり，所得＝消費

この静態の分類についてはシュムペーターの場合よりも厳密である．シュムペーターは定常的循環を静態と呼んだので，生産方法一定，利子なし，企業利潤なし，人口，生産量等の数量は均衡を維持しながら増加する場合も含められていた.[8] シュムペーターの場合，量的変化は問題ではなかったので，静態の定義についても，単にそれが定常状態の一定不変のものである必要はなかったのである．問題は生産方法が変わるか否かであり，ここでは明らかに両者のイメージしていた静態は異っている．このような理想型としての静態に対し，高田保馬は現実型としての動態というものを次のように見ていた.[9]

動態の種類

a)偶発的変動

無意志的 —— 天災など人の意志によらないもの
意 志 的 —— 戦争，新資源の発見，交通路の変更，新市場の獲得など人の意志によるもの

b)規則的変動

①一定方向に前進するもの（前進的変動）
（ア）数量的 —— 経済成長（人口増加，資本増加）
（イ）性質的 —— 経済発展（需要の変化，生産方法の変化）

より根本的なものは生産方法の変化であり，それによって生産力が増加した結果として需要の変化がおこる.

②循環的変動 —— 景気循環

景気循環を前進的変動（成長や発展）と切り離して考えられるか否かという問題に対して，この両者はきわだった違いを見せるのである．即ち，高田保馬は理論的には切り離しは可能であると考えており，前進的変動（彼の場合には量的拡大としての成長だけでも十分と考えていたが）を条件としてのみ考えているので，理論的に両者を結びつける必然性は存在しないわけである[10]．それに対し，シュムペーターは両者を切り離すことは理論上不可能と考えている．つまり，景気循環は前進的変動（彼の場合には質的な変化である，生産方法の変化による経済発展ということが考えられていた）の結果として生ずるものであるとするからである.

このように，両者は静態についても，動態についても，そのイメージを異にしていたわけである．次にシュムペーターの理論を概観しておくことにする．

4.　シュムペーターの景気理論

シュムペーターは景気の変動は資本主義経済に固有のものであり，その資本主義経済の本質を形づくるところの『革新』の遂行による「発展」が惹起すところの波動運動であるとするもので，それは彼が『景気循環論』の序文で述べた次のような文章に端的に表わされている．「景気循環を分析することは，資本主義時代の経済過程を分析すること以上を意味しもしなければ，それ以下を意味しもしない」というもので，それは『革新』によって新経済空間が創出されることであり，質的にちがった経済へ移行するときに生ずるものであると見るのである．シュムペーターも静態と動態に分け，前者は高田保馬と同様に一般均衡理論によって叙述しうる世界と考え，後者を叙述するものとして「発展の理論」を考えたのである．彼によれば，資本主義の経済とは発展の経済なのである．従って，静態的資本主義というものは語義矛盾であるということになる．このような資本主義の経済を活力あるものたらしめているものが他ならぬ「企業者」による『革新』の遂行に他ならない．即ち，それは静態における均衡を破壊するものなのである．彼はその「点火装置」としての『革新』を，新生産関数の設定もしくは生産要素の新結合であるとして，次のようなものがあるとした．[11]

1）新製品の導入
2）新生産方法の導入
3）新市場の開拓
4）新供給源の開発
5）新組織の採用

もちろん，これらの『革新』はそれ自体が体系を上下に動かすというものではなく，景気の波動運動はその『革新』によって生れた新経済空間における適応過程で見られる随伴現象として生ずるものの結果なのである．この随伴現象として生ずる量的拡大を可能ならしめるものとして，シュムペーターは信用創造を考える．即ち，均衡状態から上昇へ転ずるためには，生産の増加→供給の増加→需要の増加という経路をたどるが，そのためには増加した生産物を十分に吸収しうる需要＝所得がなければならない．これを可能とするものが信用創造である．

従って，彼のモデルでは均衡＝静態からの離脱を可能とするものは，信用創造に基づくところの「企業者」による『革新』以外にないということになる．それ故，彼の理論によれば静態においては利潤（経営報酬としての利益ではなく，純粋に創業者利得として得られるものの意味での）は発生せず，従って，利子も生じない．利子現象は動態的世界でのみ発生するという，いわゆる利子動態説はここから生じてくるのである．このように，両者ともに限界生産力説が説明しうるものは静態であり，動態を説明しきれないと考え，高田保馬はそれを説明するものとして「経済的惰力」という概念を用いたのであり，シュムペーターは「企業者」というタイプの異なった経済主体を考えたのである．

以上，簡単に両者のモデルを概観してきたので，次に両者の共通点，相違点，長所，欠点などについて比較検討をすることにする．

5.　モデルの比較

まずはじめに両者に共通するものとして，次の三つの点から検討してみよう．

1）　静・動二元論

高田保馬もシュムペーターも共に均衡における相互依存関係を説明するものとして，ワルラスの一般均衡モデルで説明される世界として静態を考える，均衡から離れた体系の運動のダイナミズムの本質を説明するものとして動態を考えるという意味で二元的なとらえ方をしている点で共通している．もちろん，同時にこの点が批判の対象ともされたのであるが，ワルラス的

な一般均衡に立脚する限り，体系の均衡離脱は何らかの外部要因に依存せざるを得なくなり，それは均衡破壊をするものである以上，均衡そのものの中からは発生するものではない．従って，均衡に向う諸力によって支配される静態的世界と，均衡を破壊し撹乱させる諸力が支配する動態的世界はちがった世界として描かれざるを得ないということになる．

2） 外生的理論

前述のように，体系が均衡に落着く傾向を持つ以上，何らかの均衡破壊の力が働かなくては変動は生じない．均衡そのものの中にそれを破壊しようとする力がない以上，その均衡破壊の力は外部的な要因を考えざるを得ない．シュムペーターはそれを『革新』の理論，即ち，「企業者」の活動に求めたのであり，高田保馬は人口増加にその力を求めたのである．この点ではモデルの理論上のスマートさは高田保馬にある．即ち，それは後にマクロの実物景気理論として見事にヒックスやサミュエルソンによって仕上げられたものの先駆となったと見られるからである．つまり，あのエレガントな定差方程式体系として描かれたモデルの本質は，適応の遅くれとして扱われる lag 理論であるが，高田保馬が意図していたものはまさにこの点であったのである．それに対し，シュムペーターの二元論はこれを発展させることが非常に難しかったため，それ以上の形で仕上げられなかった．『革新』や「企業者」の概念はそれ自身，現実を説明する上でかなり便利なものであったが，その点を強調すればする程，二元論に執着せざるを得ないというジレンマに陥ることになる．これがシュムペーターのモデルが広く受け入れられなかった理由の一つである．

3） 非数学モデル

どちらのモデルも，発想や分析の鋭さは卓越した理論によって構築されているが，それが数学的モデルでないために，論証の科学性を立証しにくかった．このような演繹的推論による理論モデルにおいては決定的な限界となったのである．とくに『革新』を何らかの数量タームで表現できなかったという点でシュムペーターのモデルは数学化できなかったのである．それに対し，高田保馬の錯誤説では，前述のように定差方程式の体系で数式化が可能となったのである．

次にそれぞれの理論の根底にある二つの原理における両者のちがいについて比較検討をしてみよう．

4） 『革新』についての評価

高田保馬は次のように分類した上で，生産方法の変化は景気変動の振幅を大ならしめると断定はできない．むしろ大なる変化，急激なる変化は不況を長びかせるかもしれないという．[12]

1）新結合・『革新』は上昇期のみならず沈滞期にも行われる．（平準化）——シュムペーターは均衡において行われ，二次的革新が上昇期に多く見られるとするので，平準化はされないと見る．

2）急激な場合，旧結合部門の損失の方が大きくなる可能性がある．（沈滞期の延長）——シュムペーターは新結合による生産要素への新らしい命令は旧命令の上に重ねられるものであり，旧命令に基づく合理性の低い部門の並存を認めている．しかし，それらはやがて来る整理の過程としての後退期に駆逐され，市場から永久に追放されると考えており，景気の後退期ないしは異状整理としての不況は，資本主義経済の発展にとって，まさしく創造的破壊の過程として重要な意義を持つものであると考えるので，沈滞期の長さについては必ずしも問題にしていない．

3）非連続的であり，景気変動というものはもっと連続的な出来事である．（非連続性）——確かにシュムペーターの『革新』は間歇的に生起するものであるが，それ故に上下の運動を循環的にもたらすわけである．しかし，その循環の周期性，即ち，『革新』の行われる間隔に一定の周期性が必要なことになる．

それ故，生産方法の変化が不断に行われるとしても，社会の購入余力（購買力）が急激に変動しないところでは景気の変動は生じない．従っ

て，「生産方法の変化なしとするも，所謂生長的変動の存し，価格の変化，ひいては利潤の変化の存するところ，景気の変動は十分可能である.[13]」ということになる．このように，高田保馬は異質のものをわざわざ持込んで厄介な二元論に陥るよりは，数量的変化から十分に変動を説明できると考えたのである．これは一見，形式上とてもスマートであるわけであるが，実はその奥に想定されている「反応装置」の性能の問題に大きくかかわることになる．即ち，次に述べる経済的惰力と高田保馬が称するところのものとも関係する問題であるが，単なる量的拡大としての成長だけでは均斉生長の可能性があり，波動的変動は必ずしも必然的に生じるわけではないということが問題になる．

5）経済的惰力について

錯誤説に立脚する高田保馬によれば，先にも述べたように，体系内の何らかの変化に対して，たとえば人口増加から生じる需要増加といった成長的変化によるものであっても，必ず経済的惰力によって適応の遅れや行過ぎを生ぜしめるということになる．これは現実には確かにその通りであろう．しかし，ここでいくつかの問題点があるように思われる．その一つは，先に述べた「反応装置」の性能についての想定である．もう一つは経済主体の想定の問題である．純粋に理論的なモデルにおいては合理的経済主体を想定しているのであって，その合理的経済人の行動には経済的惰力が生じる余地はないとするのがシュムペーターの立場である．従って，錯誤説では循環的波動運動を説明できないばかりか，むしろ適応の遅れなどの摩擦的要因は体系の均衡化への動きを助けることになると見るのである．「反応装置」の性能とはまさにこの適応能力，反応速度であり，それはその社会が持っているところの技術の水準や組織の形態や人々の行動様式・価値観などに依るであろう．さらに，その性能は学習効果によって向上することも考えられる．この様に考えると「反応装置」の性能の向上は撹乱原因とみるよりも，むしろ量的拡大という変化を均斉成長に向わせるように作用すると思われるのである．

一次接近として共にワルラスの一般均衡理論から出発し，景気の波動的運動について説明しようとするこれらの二つの理論の間には，相互に共通するものをいくつか持っていたが，それは形式上のことであって，本質的にはその変動要因についての根本的原理から異なるものであることが知られた．以上の分析をもとに，それぞれの理論が景気の各局面をいかに説明するか，言い換えれば，それぞれの理論の現実説明能力がどれ程であるのか検討をしてみることにする．

6）始発点

高田保馬もシュムペーターも均衡からの出発を考える．これは理論的整合性を考える時，最も妥当な出発点であると思われる．そして両者とも均衡（静態）からの乖離（上昇）はいずれも外生的要因以外にないと考えている．しかし，先に見てきたように，乖離に先立つ変化要因として，高田保馬は量的拡大としての成長を考え，他方，シュムペーターは質的変化としての発展を考えたのである．高田保馬によれば，それは次の様な需要先導型の順路を通って波動的運動をもたらすと考えている.[14]

人口増加→消費財生産の増加・拡張→利潤の増加→生産拡張（投資）→所得の増加→価格の上昇．即ち，はじめの均衡に於ては利子＝利潤であったものが，利潤の増加により利子＜利潤となり，これが生産拡張をもたらすと考える．利子＜利潤となるのは，一般物価，従って利潤の上昇に対して利子の上昇（適応）の遅れのためである．

これに対し，シュムペーターは経済活動に於てイニシアティヴをとるのは常に生産者の側であり，消費はそれに適応する消極的な役割しか持たないと見る．それ故，「企業者」という生産者の活動による供給先導型を考える．つまり，利子＜利潤となるのは量的な拡大によるのではなく，『革新』による利潤の創出のためである．これにより生産拡張（投資）→所得の増加→価格の上昇→消費財生産の増加という経路で進むと考えるのである．

7) 上昇過程

錯誤説によれば，上昇過程に於ては賃金の固定性という一種の惰力により，企業の蓄積を可能とする．これが生産拡張のための資本の供給を容易にする．ここでは信用創造の必要性は全くない．もちろんそれが行われたならばそれは波動運動をより活発なものにすることはあっても，波動運動を抑制するとか何らかの相殺的作用を持つものとは考えられないので，信用創造は単なる促進剤でしかない．[15]

『革新』の理論では内部の蓄積は生じていないので，生産拡張の資本は理論的には体系外からの資金，即ち，信用創造によって造り出されたものでなければならない．これが認められないと，理論上は『革新』の遂行は不可能となる．どの景気理論においてもそうであるが，いったん体系の上昇運動が始まればしめたもので，あとは比較的論理的な困難なしに上昇過程を説明することは出来るのである．即ち，上昇過程では常に利子<利潤となっているためである．

8) 上方転換点

錯誤説によれば，合理的惰力により，生産拡張に過超が生ぜざるを得ないという．そして，拡張がそれ以上進まないか，または進んでも過剰の生産物が市場に供給されるようになると景気は下降に向わざるを得なくなる．こうして上方転換点を迎えることになるのであるが，この点はシュムペーターのモデルの方がスマートである．即ち，信用創造によって『革新』を遂行した「企業者」は利子<利潤という上昇過程で得たものの中から元本の返済をはじめることになる．これが信用デフレーションの作用を通じて利潤を圧迫し，生産拡張はやがて停止し，所得の低下は体系の下方への運動をもたらすとするものである．ここでもまたシュムペーターモデルでは信用創造の処理という形であるが，信用が登場する．それ故，彼の『革新』の理論は一種の信用説という面を持っているのである．

この上方転換点の説明については，近代的な実物理論においても，完全雇用限界という天井を意識的に持込んで解決をしようと試みたが，やはりこれも不自然でぎこちなさは拭いきれない．[16]

9) 下降過程

錯誤説によれば，ここでも惰力が作用する．即ち，生産を縮小しても賃金はすぐには下らないという賃金の固着性が惰力を生むというのである．需要の増加を上まわって蓄積が進行する．そのため惰力によって均衡水準を超えて下降過程が進行する．こうして沈滞期へ向う．高田保馬によれば，沈滞期においては消費≒所得であって，均衡とはほど遠いものであるということになる．[17] これはシュムペーターが沈滞期を静的均衡状態であると考え，消費＝所得であるとするのと大きなちがいである．即ち，シュムペーターの場合には新しい水準の静的均衡状態を沈滞期としているのに対し，高田保馬の場合にはその均衡水準を下まわった，いわば不況過程を指しているようである．

いずれにしても，この様にして波動的な運動が生ずることになるのであるが，最後に残された問題として波動の周期の問題がある．

10) 波動の周期

錯誤説によれば，生産の拡張計画と生産物の供給量増加との間の lag <遅れ>のために波動運動が生ずるのであるから，その周期はその lag の長さに依存するという．これは多少形式的すぎる気もするが，少なくともシュムペーターの『革新』の理論よりは周期についてはるかに具体的である．

6. むすび

高田保馬の錯誤説は基本的には市場には均衡に向う力が働いており，静学的にとらえるならば，それはワルラス流の一般均衡理論によってその相互依存関係は説明しうるという所から出発し，変動の原因には実体経済のマクロの要素の間における調整の錯誤による失敗とするマクロ・モデルである．

それに対し，シュムペーターは「企業者」という一経済主体の変種を導入することにより，

ミクロ・モデルとして要因そのものの中にマクロ的なものを入れないように注意している．即ち，景気の変動という現象そのものはマクロの現象であるけれども，マクロの現象を説明するのにその要因をマクロの指標に求めることは危険であり，説明しようとするものの中にすでにそれを含んでしまうことになりかねないと考えたからである[18]．その点ではシュムペーターは大変慎重であり，マクロ理論に対しては非常に懐疑的であった．理論の優劣をつけることは困難であるが，シュムペーターのモデルは純粋に理論的であり，その内部での整合性という意味での理論的な完成度は高いものであったと言えよう．他方，高田保馬のモデルは理論的整合性よりも，むしろ現実説明力にウエイトを置いた感があり，それが，後に同じ類型のモデルとして発展される一つの先駆となり得た理由でもある．

かくして，ともに第一次接近として一般均衡理論の基礎的概念となっている限界生産力説に基づいて均衡ないしは静態を説明する点でも一致しており，また，動態の説明としての変動理論としてはこの限界生産力が使えないということも鋭くも見抜いていたという点で二人は共通していたのである．このように一般均衡理論ないしは限界生産力説では動態的世界は説明できないため，両者は外的な変動要因を考えざるを得なかったわけである．ここにおいて両者共に大きな困難にぶつかったわけで，その解決のためには限界生産力説を放棄せざるを得なくなったのである．その解決方法として，高田保馬は，経済活動を営む主体としての“人間”を現実に経済を営む人の持つところの錯誤という非合理性に着目して第二次接近を試みようとしたわけであり，それは経済学の依拠するところの“合理的経済人”（Homo-economicus）の想定を否定し，より現実に近づこうとしたあまり，理論自体の論理性を犠牲にしたのではないかと思われる．

それに対し，シュムペーターはこのジレンマから脱出するために，二種類の“人間”を持ち込むことで解決しようと試みたのである．一人は限界生産力説ないしは一般均衡理論のモデルで想定されている“合理的経済人”であり，この人達が経済を均衡へ向わせる働きをすると考え，もう一人の“非合理的人間”を導入し，彼が均衡破壊をするものとして第二次接近をしたのである．どちらがより理論的に整合的であるかという判定の仕方もあるであろう．また，他方どちらがより現実の説明をするかという判定の仕方もあるかもしれない．もちろん，その両方を理論なるものは具備していなければならないのであるが，景気循環ないしは景気変動の理論においては，純粋に理論モデルとして論理一貫していればよいというものではない点で厄介なものなのである．それは常に，現実の景気の波の説明という，理論的な第一次接近だけでは許されない分野であるだけに大変むずかしい問題であるわけである．おそらく，現実はこの両者の考えた要素が働いているのであり，それぞれの理論はそのちがった側面を見たということができるのではあるまいか．錯誤説の一分派として，ある遅れを変動原因とする定差方程式体系でモデル化された近代実物理論への発展は一つの方向であったけれども，異質の人間を導入したシュムペーターの『革新』のモデルの発展はどのような形で見られるものであろうか．その発展モデルがある方程式体系で示されるような形にまとめられる日が遠くないことを祈って本稿を終ることにする．　　――以上――

注

1）その著書100冊以上，公表論文500余といわれている．（早坂忠，〔15〕p.112より）

2）〔4〕，緒言，p.p.6～7

3）〔4〕，第9章，p.319

4）〔4〕，第1章，p.20

5）〔6〕，第10章，p.p.106～107

6）〔4〕，第4章，p.p.111～112

7）〔6〕，第9章，p.87の注

8）〔2〕，第2章，p.159（訳）

9)〔4〕, 第1章, p.p.14～15
10)〔4〕, 第4章, p.147
11)〔2〕, 第2章, p.p.166～167
12)〔4〕, 第7章, p.p.263～264
13) ibid, 第1章, p.20
14) ibid, 第4章, p.p.118～119
15) ibid, 第6章, p.p.233～234
16) たとえば J.R. ヒックス, (13)
17)〔4〕, 第1章, p.9以下の静態と動態についての所論をみよ.
18)〔3〕, 第4章, p.p.211～212 (訳)
19) シュムペターの年譜や著作目録については大野忠雄先生の〔12〕および別冊経済セミナーの資料を主に参照させていただいた.
20) 高田保馬の年譜や著作目録については早坂忠先生の〔15〕を主に参照させていただいた. ここに記して厚くお礼申し上げます.

参考文献リスト

〔1〕 J.A.Schumpeter, Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalokonomie, Leipzig, 1908 (木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』, 昭和11年, 日本評論社)

〔2〕 ――――――――, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, Leipzig, 1912 Auf l.1926 (中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』, 昭和31年, 岩波書店)

〔3〕 ――――――――, Business Cycles: A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process, 2 Vols., New York and London, 1939 (吉田昇三監修, 金融経済研究所訳『景気循環論』全5巻, 昭和33～44年, 有斐閣)

〔4〕 高田保馬, 『景気変動論』日本評論社, 昭和3年

〔5〕 ――――, 『経済学新講』, 岩波書店, 昭和7年

〔6〕 ――――, 『小経済学』, (有斐閣) 昭和26年

〔7〕 ――――, 『利潤成立の機構』, 京都大学「経済論叢」第26巻2号, 3号, 昭和3年

〔8〕 ――――, 『経済動態理論－その総説－』, 「社会学研究」第2巻1号, 昭和3年

〔9〕 ――――, 『勢力と経済－勢力説に対する批判』京都大学「経済論叢」第31巻5号, 昭和4年

〔10〕 吉田昇三, 『ウェーバーとシュムペーター』筑摩書房, 昭和50年

〔11〕 玉野井芳郎監修, 他訳『社会科学の過去と未来』, ダイヤモンド社, 昭和47年

〔12〕 大野忠雄著『シュムペーター体系研究』, 創文社, 昭和46年

〔13〕 J.R.Hicks, Trade Cycle, 1950 (古谷弘訳『景気循環』, 岩波書店, 昭和26年)

〔14〕 E.Schneider, Joseph A. Schumpeter : Leben und Werk eines grossen Sozialökonomie, 1970

〔15〕 早坂忠, 『高田保馬博士の生涯と学説』, 創文社, 昭和56年

〔16〕 伊達邦春, 『シュムペーター』 (経済学者と現代シリーズ10), 日本経済新聞社, 昭和54年

〔17〕 福岡正夫, 「ヨーゼフ・アロイス・シュムペーター」, 三田学会雑誌第76巻6号, 昭和59年

〔18〕 塩谷友一, 「シュムペーターにおける科学とイデオロギー」, 三田学会雑誌第76巻6号, 昭和59年

〔19〕 J.E.Elliott, Marx and Schumpeter on Capitalism's Creative Destruction : A Comparative Restatement the Quarterly Journal of Economics, Vol. XCV, 1980

〔20〕 P.A.Samuelson, Interaction between the Acceleration and the Multiplier, the review of Economic Statistics, May,1939

〔21〕 ――――――, The Theory of Pump-priming Re-examined, The American Economic Review, September, 1939

〔22〕 ――――――, A Synthesis of the Principle of Acceleration and Multiplier, The Journal of Political Economy, December, 1939

15), 16), 17) は高橋長太郎監訳『乗数理論と加速度原理』, 勁草書房, 昭和28年に収録されて

いる.

〔23〕 Robert E.Lucas, Jr., Studies in Business Cycle Theory, the MIT Press, Cambridge, Massachusetts and London

〔24〕 別冊経済セミナー『シュムペーター再発見』, 日本評論社, 1983年7月号所収の各論文